

助産師の生涯学習を動機づける要因 －自己教育力と学習方法からの分析－

松村 恵子
(香川県立保健医療大学)

【要旨】

助産師の生涯学習を動機づける要因について、今回は自己教育力と学習方法について分析した。その結果、明らかになった助産師の特徴から考えられることは、自己成長・発展の志向性が高く、他者から指摘された欠点を見直すとともに自分にも色々とりえがあると考えるなど、自らを内省し目標達成に向けて自己教育力を養おうとしていることである。また、単純な知識から複雑な知識へと系統的に積み上げていくプログラム学習と、問題意識を持って具体的事実を観察し、問題を解決しようとする発見学習が共存していることである。これらのことから、助産師では目標を達成する手段として学習方法が選択されていることが示唆された。

1. 緒言

助産師業務の質を保障し社会的評価を高めていくために最も重要なことは、WHO 出産科学技術についての勧告¹⁾に即して、ひとり一人の助産師が主体的に生涯学習する姿勢である。

生涯学習という考え方は 1965 年のユネスコの提唱を直接の契機とする。提唱者の P・ラングラン²⁾は、人の一生という時系列に沿った垂直的次元と個人の社会の全生活にわたる水平的次元の双方について学習の過程を総合するとしている。そして、1990 年に中央教育審議会³⁾は、『生涯学習は、生活の向上、職業上の能力の向上、自己の充実をめざし各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とする』などの答申を出している。さらに、金子⁴⁾は『成人はお互いに相互学習を通じて主体的に自己主導的な経験蓄積型中心の学習を推進しなければならない。1996 年のユネスコのドロール委員会は、生涯学習の 4 本柱、知ることを学ぶ。為すことを学ぶ、他者とともに生きることを学ぶ、人間として生きることを学ぶの学習目標とその目標達成に求められる諸能力を提示した』と述べている。

生涯学習では、特に個人の主体的意思に基づく学習が強調される。この主体的意思に基づく学習について、速水⁵⁾は青年期における学習の動機づけ過程として、達成目標傾向、能力・努力観、学習方法の特徴を報告している。

そこで、本研究では、専門職者として働く助産師が、生涯において主体的に学習しつづけていくためには、属性や様々な要因『達成目標傾向、能力・努力観、学習方法、自己教育力、助産師業務の自己評価』などが影響すると考え、これらを調査分析する測定用具や学習を支援する方略などについて検討している。今回は、自己教育力と学習方法の分析から、協力が得られた一部の大学病院に勤務する助産師の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象

本研究は、A県、B県、C県、D県内で働いているすべての助産師約800名と、筆者の助産師業務経験が大学病院のみであったことから、大学病院で働いている助産師を調査対象としている。現在、大学病院とA県とB県の助産師については調査を終了しているが、C県とD県については調査中である。今回は、国、公、私立の大学病院各々12施設、合計36施設を無作為抽出し、年齢や勤務経験に関係なく、協力の得られた施設と助産師を対象とした報告とする。

(2) 調査期間

大学病院に勤務する助産師の調査は、1998年12月から1999年1月とした。

(3) 自己教育力と学習方法についての考え方と測定用具

自己教育力については、梶田⁶⁾の「自らの接するところ体験するところのすべてを自己の認識の拡大深化のための糧とし、自己成長のためのきっかけとする」が、本研究の目的に沿っていると考え、梶田が作成した『自己教育性調査票(30項目)』を用いた。学習方法については、〈学習とは何のために行うのか、どのように学習すればよいのか、学習はどのようなしくみで起こるのか〉等、学習者がどのような学習方法をとるかは、学習する内容と目標によって異なると考え、文献検討後にプログラム学習法と発見学習法の観点から15項目の構成で作成し、その質問紙を用いた。いずれの質問紙もリッカート尺度の5段階(1=全く違う、2=違う、3=どちらでもない、4=そうである、5=全くそうである)とした。

(4) データの収集方法

1) データ収集の手続き

各大学病院の看護部長に郵送で質問紙調査の主旨を説明し協力を得た。看護部を通じて一施設10名の協力を依頼した。調査協力の依頼文書と質問紙票を送付した。回収は看護部が約3週間で一括回収し返送を依頼した。

2) 倫理的配慮

調査票の表紙に明記した研究の目的と、データの分析方法について統計的に処理することを文書をもって説明した。研究に対する賛同と調査に協力の意思を表した施設と助産師を対象とした。調査票は無記名で封書による一斉回収とし、個人が特定できないように配慮した。また、研究目的以外には使用しない

ことと全体の調査結果を報告することを約束した。

(5) データの処理

統計解析パッケージ SPSS 12.0 J を用いた。独自に作成した測定用具のため、妥当性、信頼性、次元性の検討が必要であるが、妥当性と次元性の検討は特に研究の積み重ねが必須となる。したがって、今回は実証するための資料を得る研究段階にあると考え、項目全体の等質性の観点から信頼性分析を行い Cronbach's の Alpha (α) 係数より内的整合性を検討した。そして、自己教育力と学習方法の因子構造を明らかにする因子分析を行った。因子分析は、一般的に直交回転（バリマックス法）が多用されているが、本研究では因子間で成分相関があることを仮定し、主成分分析、斜交回転（プロマックス法）を用いた。次に重回帰分析（線型回帰、強制投入法）を行い因果関係モデルを設定した。

3. 結果

(1) 回収率

360 部を配付した結果、有効回答数は 309 部で回収率は 86% であった。

(2) 対象者の背景

平均年齢は、30.8 歳、22 歳から 58 歳で標準偏差は 7.11、業務経験の平均は、8.0 年、8 ヶ月から 35 年で標準偏差は 6.46、助産師志望の平均は、20.0 歳、6 歳から 40 歳で標準偏差は 3.02 であった。

(3) 主要変数の記述統計

表 1 に示したように、自己教育力について肯定が高いのは、「11.自分がやり始めたことは最後までやり遂げたい」、「8.自分の能力を最大限に生かすように努力したい」、「9.認められなくても自分の目標に向かって努力したい」、「20.他人から指摘された欠点は自分でも考える」であった。その反面、低いのは、「28.自分のことが恥ずかしい」、「27.何をやってもだめである」、「2.自分に自信がある」、「人の一生は結局偶然のことで決まる」であった。

表 2 に示したように、学習方法について肯定が高いのは、「11.好きな領域を集中的に学習する」、「13.解らないことがあれば自分で調べようとする」であった。その反面、低いのは、「7.学習し理解できても業績に反映しなければやる気ない」であった。

(4) 因子分析と信頼性分析からの因子構造

因子分析の結果、自己教育力では 5 因子を抽出した。因子Ⅰは「8.自分の能力を最大限に生かすように努力したい」、「11.自分がやり始めたことは最後までやり遂げたい」、「13.自分の仕事の将来設計に向かって努力したい」等 8 項目で《目標達成》と命名した。 α 係数は 0.837 であった。因子Ⅱは「28.自分のことが恥ずかしい(負の因子負荷量)」、「20.他人から指摘された欠点は自分でも考える」、「30.自分にも色々とりえがある」等 5 項目で《自己の対象化と統制》とした。 α 係数は 0.641 であった。因子Ⅲは「2.自分に自信がある(負の因

子負荷量)」、「1.現在の自分に満足している(負の因子負荷量)」、「7.今のままの自分ではいけない」等5項目で《自信と満足》とした。 α 係数は0.648であった。因子IVは「3.他人に馬鹿にされるのは我慢できない」、「23.疲れているときは何もしたくない」等4項目で《感情の統制》とした。 α 係数は0.608であった。因子Vは「22.腹が立ってもひどいことを言ったりはしない」、「21.できるだけ自分を抑えて他人に合わせる」の2項目で《言動の統制》とした。なお、「19.自分の良いところ悪いところはわかっている」、「29.生まれ変わるとしたらやはり今の自分に生まれ変わりたい」は、0.30以下の因子負荷量であった。自己教育力30項目全体のCronbach'sの α 係数は0.686、各尺度では、因子I以外は0.70以下であり信頼性(内的整合性)は確認できなかった。

学習方法では3因子を抽出した。因子Iは「10.覚えたものを他の問題の解決に応用しようとする」、「9.機械的に暗記ではなく筋道を立てて覚えようとする」、「13.解らないことがあれば自分で調べようとする」等6項目で《発見・プログラム学習》と命名した。 α 係数は0.727であった。因子IIは「4.皆で競争して学習することが好きである」、「1.応用問題が好きである」、「3.皆で意見や考えを出し合って学習することが好きである」等6項目で《発見学習》とした。 α 係数は0.715であった。因子IIIは「7.学習し理解できても業績に反映しなければやる気ない」、「12.問題を解決した時に誰かに認められないとやる気を失う」の2項目で《プログラム学習》とした。なお、「14.皆の学習具合を気にしながら自分の学習を進める」は、0.20以下の因子負荷量であった。学習方法15項目全体のCronbach'sの α 係数は0.720、各尺度では、0.70以上であり信頼性(内的整合性)は確認できた。

(5) 因子成分の相関

自己教育力と学習方法の関係について、因果関係を明らかにする前段階として従属変数を定める指標を得るために、成分行列—構造行列を吟味し成分相関行列から因子成分の相関を検討した。自己教育力では、図1に示したように因子I《目標達成》と因子II《自己の対象化と統制》で $r = 0.410$ 、因子I《目標達成》と因子V《言動の統制》で $r = 0.184$ と2つの有意な正の成分相関が、また因子II《自己の対象化と統制》と因子IV《感情の統制》で $r = -0.183$ と有意な負の成分相関が明らかになった。

学習方法では、図2に示したように因子I《発見・プログラム学習》と因子II《発見学習》で $r = 0.464$ 、因子I《発見・プログラム学習》と因子III《プログラム学習》で $r = 0.437$ と、2つの有意な正の成分相関が明らかになった。

(6) 自己教育力と学習方法の因果関係モデル

学習方法の因子成分は、すべてにおいて相関が高かくこれらの変数間で、また、自己教育力の因子成分では、《目標達成》と《自己の対象化と統制》で多重共線性が認められたが、今回は《目標達成》を規定するモデルを採用した。

表1 自己教育力の因子構造

(n = 309)

項 目	因 子 負 荷 量					共 通 性	平 均 値	標 準 偏差
	I	II	III	IV	V			
《目標達成》 α 係数=0.837								
8.自分の能力を最大限に生かす努力をしたい	0.770	0.424	0.185	0.020	0.029	0.637	3.98	0.594
11.やり始めたことは最後までやり遂げたい	0.728	0.446	0.076	0.166	0.091	0.568	4.02	0.633
13.仕事の将来設計に向かって努力したい	0.683	0.333	0.055	0.043	0.096	0.476	3.85	0.675
10.自分でなければできない事をやってみたい	0.681	0.277	0.095	0.132	0.097	0.465	3.79	0.746
9.認められなくても目標に向かって努力したい	0.643	0.450	0.197	-0.175	0.029	0.539	3.95	0.635
12.良い仕事をして多くの人に認められたい	0.577	0.065	-0.079	0.311	0.219	0.431	3.49	0.709
5.他人から尊敬される人間になりたい	0.571	0.023	-0.110	0.330	0.197	0.454	3.55	0.708
26.嫌になった事でももう少し続けようとする	0.437	0.293	0.126	-0.103	0.197	0.254	3.35	0.667
《自己の対象化と統制》 α 係数=0.641								
28.自分の事が恥ずかしい	-0.237	-0.618	0.359	-0.025	-0.071	0.475	2.31	0.713
20.指摘された欠点は自分でも考える	0.366	0.605	0.110	0.042	0.126	0.439	3.94	0.473
30.自分にも色々とりえがある	0.329	0.557	-0.179	0.221	0.124	0.428	3.78	0.609
17.良くないところは考え直すようにしている	0.368	0.498	0.110	0.023	0.117	0.314	3.82	0.575
16.人の一生は結局偶然のことで決まる	-0.155	-0.442	0.070	0.166	0.126	0.231	2.57	0.788
25.ちょっと嫌な事があると直ぐ不機嫌になる	-0.085	-0.434	0.214	0.275	-0.271	0.316	3.00	0.789
14.何の為学習や努力するのか嫌になる事がある	-0.015	-0.427	0.156	0.327	0.020	0.271	2.85	0.848
15.ぼんやりと何も考えず過ごす事が多い	-0.070	-0.351	0.301	0.328	-0.039	0.280	3.13	0.848
27.何をやってもだめである	-0.173	-0.339	0.076	-0.083	-0.028	0.137	2.47	1.864
《自信と満足》 α 係数=0.648								
2.自分に自信がある	-0.037	0.148	-0.733	0.102	0.049	0.546	2.57	0.763
1.現在の自分に満足している	-0.058	0.063	-0.680	0.550	0.069	0.464	2.75	0.866
7.今のままの自分ではいけない	0.330	0.032	0.597	0.009	0.035	0.429	3.60	0.801
4.自分が嫌になることがある	0.072	-0.089	0.449	0.139	-0.035	0.230	3.67	0.788
6.現在の自分は幸福である	0.127	-0.358	-0.424	0.018	-0.049	0.293	3.61	0.783
29.生まれ変わるなら今の自分に生まれ変わりたい	0.014	0.072	-0.198	-0.066	0.029	0.048	3.26	1.921
《感情の統制》 α 係数=0.608								
3.他人に馬鹿にされるのは我慢できない	0.273	-0.011	-0.138	0.551	0.181	0.365	3.50	0.714
23.疲れているときは何もしたくない	0.095	0.070	0.059	0.456	0.010	0.253	3.86	0.787
18.自分の考えや行動が批判されても腹が立たない	-0.035	0.034	0.047	-0.376	0.095	0.157	2.64	0.736
24.他の事をしてやろうとした学習ができない	0.095	-0.018	0.212	0.373	-0.064	0.209	3.63	0.683
19.自分の良いところ悪いところはわかっている	0.143	0.240	-0.167	0.259	0.082	0.166	3.45	0.660
《言動の統制》 α 係数=0.518								
22.腹が立ってもひどい事は言わない	0.153	0.173	-0.080	-0.161	0.844	0.754	3.19	0.787
21.できるだけ自分を抑えて他人に合わせる	0.040	-0.085	0.098	0.176	0.330	0.162	3.16	0.733
固有値	5.08	3.24	2.23	1.72	1.43			
寄与率	16.93	10.80	7.43	5.74	4.79			
累積寄与率	16.93	27.74	35.18	40.92	45.72			

表 2 学習方法の因子構造

(n = 309)

項 目	因子 負 荷 量			共通性	平均値	標準偏差
	I	II	III			
《発見・プログラム学習》 α 係数 = 0.727						
10. 覚えたものを他の問題の解決に応用する	0.718	0.458	-0.203	0.541	3.66	0.655
9. 機械的に暗記でなく筋道を立て覚えようとする	0.627	0.265	-0.284	0.394	3.66	0.655
13. 解らないことがあれば自分で調べようとする	0.596	0.274	-0.155	0.371	3.72	0.633
8. 上司に認めてもらえないときでも学習する	0.559	0.137	-0.390	0.347	3.65	0.618
11. 好きな領域を集中的に学習する	0.476	0.261	-0.156	0.231	3.43	0.833
15. 新聞や雑誌など広く学習が好きである	0.437	0.320	-0.211	0.213	2.61	0.766
《発見学習》 α 係数 = 0.715						
4. 皆で競争して学習することが好きである	0.057	0.540	0.289	0.368	2.88	0.817
1. 応用問題が好きである	0.410	0.534	-0.196	0.343	3.42	0.767
3. 皆で意見や考えを出し合う学習が好きである	0.404	0.530	-0.168	0.328	2.99	0.736
2. 業績などに結びつくことは学習する	0.124	0.467	0.236	0.262	3.67	0.781
5. 資格を得るなどの目標があると学習する	0.105	0.332	0.178	0.137	2.79	0.737
6. 難しい問題は後回しにせず考え続ける	0.284	0.307	-0.145	0.128	2.52	0.718
《プログラム学習》						
7. 学習し理解しても業績反映ないとやる気ない	-0.271	0.057	0.706	0.500	2.52	0.718
12. 問題解決時、認められないとやる気を失う	-0.284	0.048	0.598	0.359	2.71	0.741
14. 皆の学習具合を気にし自分の学習を進める	-0.029	0.063	0.220	0.054	2.95	2.410
固有値	3.39	2.02	1.11			
寄与率	22.64	13.52	7.46			
累積寄与率	22.64	36.17	43.63			

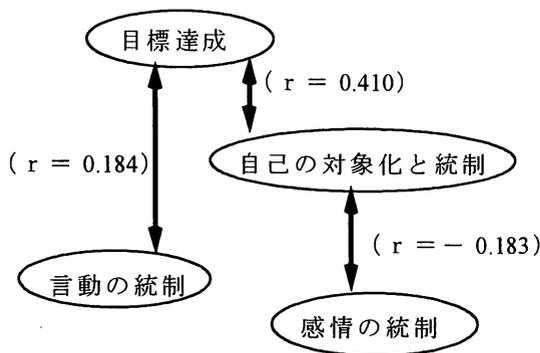


図 1 自己教育力の成分相関

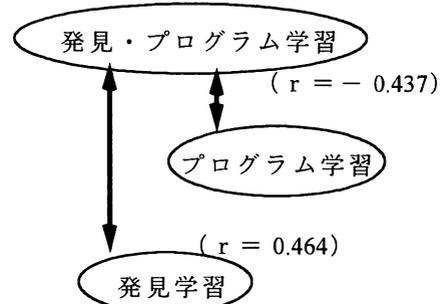


図 2 学習方法の成分相関

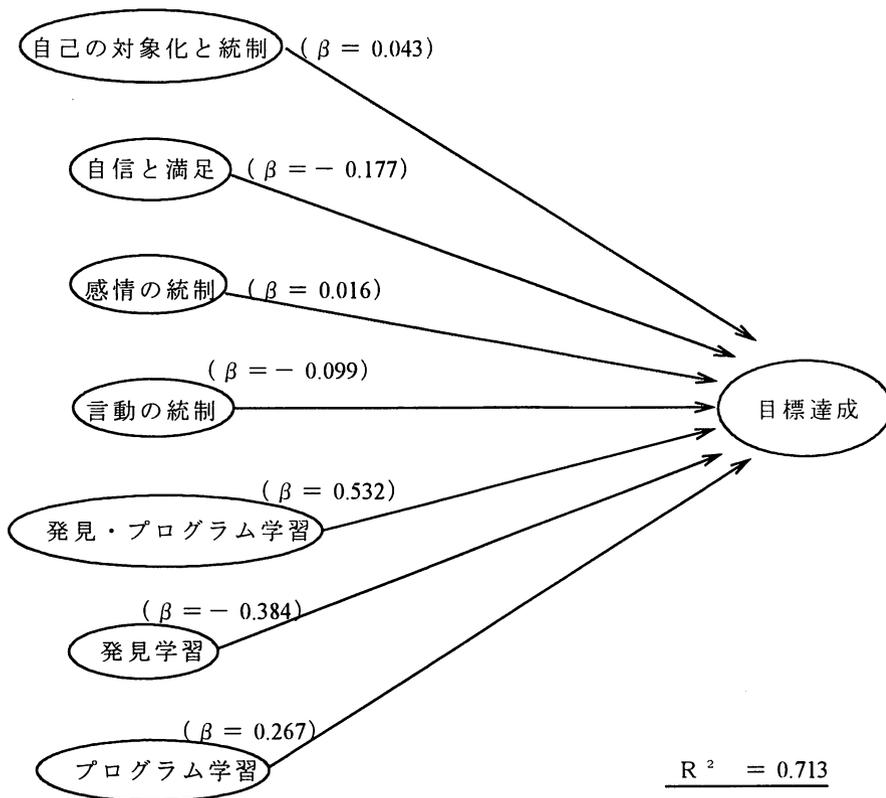


図3 自己教育力と学習方法の因果関係モデル

重回帰分析の結果、図3に示したように《目標達成》を従属変数、他の因子を独立変数としたモデルを設定した。標準化係数(β)は、次の3つにおいて有意な相関関係が見られ($p < 0.001$)、説明率は0.713であり適切と解釈した。このモデルでは、《目標達成》を規定する順列は、《発見・プログラム学習》($\beta = 0.532$)、《プログラム学習》($\beta = 0.267$)であり、これらが高ければ《目標達成》を高める関係にあることが明らかになった。また、《発見学習》($\beta = -0.384$)であり、これが低くなることによって《目標達成》も低くなることが明らかになった。その反面、《自己の対象化と統制》、《自信と満足》、《感情の統制》、《言動の統制》では関係性が見られなかった。さらに、独立変数間で多重共線性が認められることによって、このモデルでは従属変数《目標達成》を規定する独立変数が少ないことが明らかになった。今後の検討課題といえる。

(7) 助産師の特徴

わが国では、看護師の資格を取得し次の専門職者の水準として助産師の資格を取得することが法的に義務づけられ、助産師自らの診断に基づいて業務を実施しその行為を独占することが認められている。したがって、教育課程では、自ずと助産師業務のすべてを主体的に展開し、自律した個人として実施できる

ように教授学習する。またその適性があるかどうかを問う厳しさが、この厳しさに立ち向かう姿勢がないと助産師に到達することは困難になる。

今回の結果では、助産師の教授学習や適性が大きく影響していると推測され、学習することは自己の責任であり義務と考え、努力しようとする姿勢が明らかになった。但し今後、他の職種と比較検討し特徴を明らかにする必要がある。

4. 考察

本研究は、助産師の生涯学習を動機づける幾つかの要因の中から、今回は自己教育力と学習方法について分析し、その特徴を明らかにすることが目的であった。明らかになった特徴から考えられることは、第一に、自己教育力では「自分がやり始めたことは最後までやり遂げたい」や「自分の能力を最大限に生かすように努力したい」など、成長・発展への志向が高いことであった。学習方法では「好きな領域を集中的に学習する」や「解らないことがあれば自分で調べようとする」など、自分の目指す方向や成す事柄について一定の感覚を持ち、ひいては自分の願いとねらいを持ち進もうとする意識が高いことが推測された。これらのことから、専門職者としての技能が要求される助産師では、特に自分で学ぼうとする姿勢と、自分にとって学ぶ価値がある課題は何か探求していこうとする意思を強く持っているのではないだろうか。

第二に、自己教育力では《目標達成》と《自己の対象化と統制》で、学習方法では《発見・プログラム学習》と《発見学習》で有意な成分相関が明らかになった。これらのことから、自分自身のありのままの現実を認識しながらも、その現実にとらわれない開放的な心で、未来に向かっての可能性を認識し、自分が選択した方向へ、自分自身が近づくように働きかけるための学習を見つめようとする意思を強く持っていることが推測された。

人間は誰でも少なからず、このことをやってしまわなくてはと思いつつも、他のことにかまけてしまい集中できなかつたり、途中で挫けて持続できなかつたりすることがあると思う。また、自分の学習成果が期待していた水準に大きく届かなかつたことを知ると、落ち込んでしまつて、次へ向かつてのやる気を失つてしまつたり、逆に期待していた以上の成果が挙げると有頂天になって、その事実にしがみついてしまい、新たな課題に取り組もうとする気持ちを見失いがちになることもあると思う。生涯学習において、大切なことはこれまでのことを振り返り考える姿勢を、現実のことを直視する勇気を、未来のことを考え希望を持ってすすむ力を育てることではないだろうか。

第三に、自己教育力と学習方法の因果関係モデルから、学習主体としてのひとり一人が判然とした見通しや問題意識を持ち、どのような条件下でも、自らを向上させる方向へと、自らを駆り立てることのできる強さとエネルギーを持っていることが推測された。自己の内に存在するものを外に出してみつめ、自己を対象化することによって、自ら考えて学び探求し発見する力を積み重ねる

努力など、そんな日々のたゆまない活動が生涯学習へと繋がっていくのではないだろうか。

5. 結語

現代社会は、社会変動や技術革新などによる生活の変化、あらゆる物事における加速化が進む中、人は生命について考え、創造的に生きる術を問う必然性迫られている。そして、学ぶことは生きることであり、より良く生きるためによく学ぶ、というライフスタイルを求めようとする人々が今、少しずつ増えようとしている。課題は、どのようにして、知ること、為すこと、他者とともに生きること、人間として生きingことを学ぶかである。

特に、少子高齢社会において、助産や母子保健活動を軸として、出産や子育て支援など次世代を担う人づくりをめざして働く助産師は、自らの生涯学習をどのように動機づけ実行しているかが問われる。

今回は、動機づけに影響すると考えられる要因の中から、自己教育力と学習方法について検討した結果、他者の意見などに動かされたり頼ってしまうのではなく、自ら思考できる力を育てるために、自己成長をめざして学習する姿勢を持つ助産師が浮き彫りになった。

今後さらに、能力・努力観や助産師業務の自己評価との関係、業務の経験年数と内容など、特定の状況的要因を含む属性との関係などについて検討を重ねていきたい。

【謝辞】

本研究の調査にご協力いただきました国立、公立、私立大学病院の看護部の皆様、助産師の皆様に深謝申し上げます。

【文献】

- 1) WHO 出産科学技術についての勧告 WHOREport/ICP/MCH/102/m02(S)1301K 10 june 1985. 日本助産学会誌, 1995年, 9(1), p64.
- 2) 天城 勲, 生涯学習管見, 教育と医学, 慶応通信, 1993年, p2.
- 3) 斎藤哲郎, 国における生涯学習政策の展開, 日本生涯教育学会年報, 第18号, 1997年, p4.
- 4) 金子忠志, 能力観の変遷と生涯学習, 日本生涯教育学会年報, 第23号, 2002年, p90.
- 5) 速水敏彦, 高校生における学習の動機づけ過程, 文部省特定研究報告書, 名古屋大学教育学部, 1990年, p31-42.
- 6) 梶田叡一, 自己教育への教育, 明示図書出版, 1991年, p50-51.